



柔らかな作風で 生涯現役を貫いた女性蠟型原型師

さかい しずじょ
酒井 静女 (1909~1992)

酒井静女（本名 静江）は、明治42年（1909）10月10日、岐阜県土岐郡（現瑞浪市）の半農半陶を営む家に生まれた。昭和7年（1932）、23歳の時、蠟型鑄物2代目須賀松園（昭和49年 人間国宝）に嫁いだ姉のお産を手伝うために高岡を訪れた。家事を手伝う中、優雅で繊細な松園の作品に魅せられた静女は、弟子になることを望むようになった。しかし、松園は「女性に務まる仕事ではない」と入門を許さなかった。そのような中、松園やその弟子たちと訪れた岡山県倉敷市で、幅1メートルほどの銅製太鼓を見た。蠟型鑄物のもつ人間味ある柔らかさに強くひかれ、その世界に入る強い決意を抱いた。

昭和14年（1939）ごろ、ようやく入門を許された静女が任された仕事は竜のひげ作りであった。長さ数センチメートルの竜のひげを蠟で作り、松園に差し出すのだが、不揃いであつたり丸みがなかつたりすると、何度も作り直すよう求められた。松園からは「心が肝心、技術は後からついてくる」「日常生活の細かいところから真実を見るように」と教えられ、制作態度や生活面まで細かく指導を受けた。

昭和18年（1943）、34歳の時、初めて文展（現在の日展）への出品が松園に認められた。感激に満ちた静女は、白菜をかすり模様で表現した花瓶を制作し、初入選を果たした。当時、金工部門での入選は女性では珍しいものであった。翌年には芸術保存資格者としての認定を受け、蠟型原型師として高い評価を得た。しかし、時局は静女に制作に没頭する時間を許さなかった。戦中・戦後の苦しい生活の中、静女は時に知り合いの農家を回って食料を求め、時に松園の蠟型をリアカーに載せて焼成できる鑄造窯を探し回り、須賀家の生活を支えた。

昭和24年（1949）頃、松園が高岡市中川町に新工房を設けた。新工房には、美術関係者や新聞記者、会社役員などが頻りに訪れた。静女は制作に励む傍ら、姉と共に客人をもてなした。静女の行き届いた心配りは職人たちと世間をつなぐ潤滑油としての貴重な役割を担った。

松園の厳しい教えの下、静女の技法は磨かれていった。静女が得意とした「火舎（^{ほや}仏事に用いる蓋の付いた香炉）」は、高さ5センチメートル程である。モチーフは、サザエやカニをはじめ、井戸をのぞく人の姿もあり、精巧を極めたものである。女性ならではの繊細かつ柔らかな作品の数々は、静女の豊かな感性と柔らかな手指によって生み出された。富山県展での知事賞受賞や日展での数々の入選を経て、昭和49年（1974）、65歳の時、松園より「お前は一人でやっていける」という言葉をもらった。入門から30年以上がたち、ようやく一人前の職人として認められた瞬間だった。静女は、師の教えに応えるため、そして人生をこの道に捧げると決めた信念を貫き通すため、一層根気強く制作に取り組んだ。昭和62年（1987）に白内障を患い、細かな作業ができなくなったが、手術によって視力が回復。再び制作に打ち込める喜びから、月に20作品を制作することもあった。銅の冷たさや重たさを感じさせない温もりのある静女の作品は高い評価を受け、数々の個展が開かれた。

平成4年（1992）に他界。「手が止まったら、死んだらと同じ」と晩年まで制作を続け、生涯現役を貫いた。
＜専門員 松田啓宏＞



蠟の柔らかさを生かして籠を製作する



唐草透香爐（鶯北隆一氏蔵）